

初等部5年 国語 朗読「雪わたり」

鶴尾 基子

初等部5年生は、宮沢賢治の代表的な作品、「雪わたり」を朗読した。この物語は賢治のリズム感のある語り口や、比喩などの表現技法がちりばめられていて、賢治らしい独特の作品世界が描きだされている。狐の紺三郎と人間の四郎、かん子の関係が変わっていくところを叙述に即して読み取らせ、その変容がわかるように、表現活動ができればと考えた。

原作は30分の物語文である。今回は「梶山正人 オペレッタ曲集」 子どものためのオペレッタⅡ 一莖書房の本を参考に朗読発表用に構成し直した。挿入歌11曲を含む、約30分の「5年生の雪わたり」に仕上げた。

I. はじめに

5年生は、まとまりがあり団結力のある組である。思春期にさしかかると、周囲を意識するあまり自分を表現することに躊躇したり、失敗を極度に避けようとしがちだ。この組の5年生は声を出すこと、歌うことに、素直で戸惑いが無い。1学期に行った宿泊学習先では、お世話になったスタッフの方々に感謝の気持ちを歌にして表した。表現活動も恥ずかしがることなく出来る人が多い。

宮沢賢治の「雪わたり」をじっくりと読み深め、組で力を合わせ一つの作品を創り創り上げる楽しさを経験させることを目標に取り組んだ。



II. 報告会までの学習

1. 1学期

(1) 音読のおさらい

毎日のおさらいに音読を取り入れた。教科書の単元のほかに、詩、俳句、短歌、漢詩を取り上げ、

繰り返し読んだ。音読カードには、5つの観点(①正しく②声の大きさ③はっきりと④間の取り方⑤表現に気をつけて)をもとに保護者の方にも聞いてもらうようにした。

2. 2学期

(1) 音読のおさらい

1学期に引き続き、音読カードで励んだ。「雪わたり」本文の音読練習、北原白秋による「五十音」の詩からの発音練習、台本による音読練習を5つの観点(①正しく②声の大きさ③はっきりと④間の取り方⑤表現に気をつけて)に気をつけ保護者の方にも聞いてもらうようにした。

(2) 本文の読み取り

登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、叙述に即して的確に読み取っていく。変容がわかるようにプリントに3つの観点(①登場人物の気持ちのわかる②人物・場面の様子がわかる③表現が工夫されているところ)をもとに一人ひとりがプリントに整理し、まとめていった。

(3) 歌指導

音楽の授業時間に挿入歌11曲(子どものためのオペレッタⅡ曲集より)の練習をする。曲に合わせて語りの部分も練習する。

(4) 母音指導

昨年度、劇団四季の方に5、6年生に特別授業

をしていただいた。その時の指導をもとに、音読においての母音の大切さ、蓮子音、蓮母音のことを勉強した。それをもとに発声の強化に取り組んだ。

(5) 朗読用 台本

11月上旬には朗読用台本を渡す。順番読み、役読みを繰り返し行った後、希望の役に分かれ、役読みを行う。配役は希望者が多いところは子ども達で話し合っ決めて、そのほかのところは多数決によって決めた。

(6) ステージ練習

体育館でのステージ練習を行った。よりよい舞台にしていくため、練習後は短い反省の時間をとる。DVDに発表の様子を撮り、より客観的に表現活動ができてきているかの確認を行った。計16回の舞台練習を行った。

(7) 美術

美術教師に協力してもらい、背景の雪原の絵を全員で合作した。幻灯の場面は個人で描き投影した。



(8) 宮沢賢治について調べる

賢治について調べ学習の時間をとる。個人で資料を用意させたほか、学校図書館、東久留米図書館から関係する本、約40冊程用意した。調べ学習を個人で行い新聞形式でまとめた。

(9) 宮沢賢治のほかの作品を読む

優れた叙述や賢治の作品世界は一作品だけでは

もったいない気がした。ほかの作品へも読み広げるため、組全員の人が「雪わたり」以外の作品に触れることを呼びかけた。読書の時間を設定し全員がほかの作品を読むことができた。「雪わたり」と比べ、賢治の表現の特徴に気づく児童もいた。何人かの児童は2冊以上読むことができた。

(児童が読んだ宮沢賢治の作品)

注文の多い料理店	12人
セロひきのゴーシュ	11人
猫の事務所	6人
どんぐりと山猫	4人
風の又三郎	2人
銀河鉄道の夜	2人
鳥の北斗七星	1人

Ⅲ. 報告の内容 (抜粋)

報告用 「雪わたり」

①場面

語り 雪はふり 雪はふり
雪ふりつづき ふりつづき
野山をおおい ふりつづき
里をうずめてふりつづき
きつねをねむらせ ふりつづき
子どもとじこめふりつづく

歌・雪わたり

全員 かた雪かんこ しみ雪しんこ

地の文1 2 3

全 かた雪かんこ しみ雪しんこ

歌・顔かがやかせ

四郎1

紺三郎1

地の文4 5 6 7

歌・四郎、かん子、きつねの歌

語り 雪かたまって 橋になり

ふたつの国に橋かかる

こちらの国とあちらの国

雪の橋かかる 雪の橋わたれ

地の文8

四郎2

紺三郎2 3 4

歌・紺三郎の歌

紺三郎 5

歌・四郎の歌

紺三郎 6 7 8

かん子 四郎 3

しかの子

地の文 9

歌・雪の橋渡ろう

全 かた雪かんこ しみ雪しんこ

かた雪かんこ しみ雪しんこ

②場面

語り くま笹は 葉をかさね 葉をかさねしげる

夏の日 は 道かくす 道かくししげる

あちらの国と こちらの国の道かくす

いま 雪の原 白いちめんの雪の原

歌・狐小学校の幻灯会

地の文 10

四郎 5

かん子

一郎、二郎、三郎

語り 雪かたまって 橋になり

ふたつの国に橋かかる

こちらの国とあちらの国と

雪の橋かかる 雪の橋わたれ

きつねの子

四郎 5、かん子

歌・狐の幻灯会

紺三郎 9

四郎 5

全 かた雪かんこ しみ雪しんこ

かたいおもち は かつたらこ

白いおもち は べつたらこ

地の文 11、12、13、14、15

紺三郎 10

全 幻灯 お酒飲むべからず

四郎 5

歌・ひるはカンカンひのひかり

全 幻灯 わなを軽べつすべからず

地の文 16、17

紺三郎 11

表現曲

終曲・月かげこぼれる森の中



IV. 報告会を終えて

児童の作文から 一部抜粋

今年、私たち5年生は勉強報告会で「雪わたり」のろう読を發表した。勉強報告会までには、毎日いっぱい練習した。学校ではステージ・歌の練習、家では音読をした。・・・

そしてついに勉強報告会の日になった。私はちょっときん張したけれど自分で思っていたよりきん張していなかった。自分のせりふを言い終わると、ちょっと安心した。勉強報告会が終わると私は（ついにやっと、終わった。）と思った。いつも練習ではずっと立っていて足がつかれるけれど、あまり気にならなかった。家に帰ってお母さんに感想を聞いたら「すごく良かったよ。」と言ってくれたのでうれしかった。初等部最後の勉強報告会だったけれど、いい発表ができたと思う。（女子）

・・・また練習をビデオでとってそれを教室で見るということもスタートしました。なのでビデオを見てもいい練習ができてるように、後ろでの態度もどんどん良くなっていきました。そしてステージ練習を何回も繰り返したのち、リハーサルになりました。本番もできるように全力を出します。今までとはちがいが、ステージでの設備や椅子をそろえたりもしているし、先生もたくさんいて、かぎりなく本番に近づけている中での練習。中村先生も見ていてきん張したけれど、ちゃんとしたぼくらを見せたくて、しっかりやりました。みんなははっきりと声を出し、ひとりも台本をもたずに、セリフを覚えている。後ろの態度もいい。（みんな成長したな。）と思いました。（男子）

・・・ついに5年生の番。ぶたいの上に立つと心ぞうの音が大きくなり、「ドッキン、ドッキン」と鳴った。自分ができるか心配しているところは語りの3人で言うところと、自分のセリフ、その1とその2の間だ。語りのところは息をあわせるのと声の大きさが大事。となりの人が息をおもいきりすったら、(言うな。)と思い、それが合図になってせりふを言える。声はこわがらずに、思いっきり出した。・・・(女子)

・・・そして五年生の発表が始まった。だが、つる尾先生が後ろに立っていて、見てみると、なぜかほっとした。なんかお客がみえないのだ。びっくりした。そしてぼくが言う番。ゆっくり言えるかなどいろいろ頭をよこぎった。でもゆっくり、間もとって言っていた。言い終わるとほっとした。終わった。生きた心地がしなかった。でもよくできてよかった。(男子)

・・・そしていよいよぼくの番がきた。ぼくはいっきに体温が上がってしまった。こうふんしたからだ。自分の顔が赤くなっていないか、心配しながらできるかぎりの声の大きさ、表現力を使った。言い終わってからはとても不思議な感かかった。・・・終わったらとっても気持ちのいい気分になった。楽しかった。(男子)

・・・最初は宮沢賢治の「作品はおもしろくなくてむずかしいイメージがあった。でも「雪わたり」を勉強して、宮沢賢治の物語はそんなにかた苦しなくて逆におもしろい。「命」という物を大切にす愛でいっぱい作品だと思った。これからも宮沢賢治の作品をたくさん読みたい。(女子)

10月に入って私達五年生は勉強報告会の「雪わたり」のことをやり始めた。私は宮沢賢治さんの童話などはとても好きなので、(楽しみだな。)と思った。最初は雪わたりのプリントに思ったことを書いたり、良かったところに線をひいたりした。こうすると、ふつうに読むよりもこの物語のことがよく分かった。「台本を配ります。」ついに台本が配られた。音楽の時間でも雪わたりの歌を歌っ

ていたので、とてもワクワクした。その後、教室やステージなどで沢山練習した。私は毎日家で音読もした。そうしたら、だんだん声も大きくなってきてゆっくり言えるようになった。宮沢賢治さんのことについて新聞も書いた。そうしたら、他の作品や賢治の一生など色々なことが分かった。宮沢賢治さんの作品も久しぶりに読んでみた。読んだことがない作品にもちょう戦した。・・・(女子)



V. 終わりに

発表後、子ども達は達成感をもって報告会を終えた。「ああ、もう組のみんなで雪わたりを朗読することはないだ。なんか寂しいな。」と言った児童がいたが、宮沢賢治の人柄と作品を心から感じ、十分に表現することができたと思う。声を届けること、受け止めることの楽しさを味わいながら、「5年の雪わたり」の舞台を皆で創り上げることができた。

朗読には読み手と聴き手の心に響く不思議な力がある。一生懸命に朗読する児童の声と姿が重なったとき、聴き手はある種の感動を覚える。そうした聴き手の気持ちが児童の心へと届き、読み手と聴き手が感動を共有することができる。まさにそのことが実感できた報告会であった。

VI 参考文献

子どものためのオペレッタⅡ

梶山正人 (一莖書房)

雪渡り 宮沢賢治作 日本の童話名作選(偕成社)

宮沢賢治 西本鶏介 (ミネルヴァ書房)